慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会価値の概念
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.2, No.4 (1909. 11) ,p.324(88)- 332(96)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19091101-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一方の戰爭上の權利に反對して其對敵國を援助する一の犯罪行爲となせる結果封鎖違反者は或は之を俘虜となし、或は之を死刑に處したりと雖も、今日に於ては斯かる思想は一變し、中立國人民は其艘舶を以て封鎖港と交通するの自由を有すると同時に交戰者は戰爭法上の權利として其出入を妨げ之を捕獲することを得るに過ぎず。從て封鎖の違反は決して國際公法上の犯罪にも非ず。又必ずしも違反者本國法上の犯罪にも非ざるを以て封鎖衝破の艘員は須らく解放せらる可きものなりとなさるゝに至れり。左れど若し審檢の爲め必要あるときは一時彼等を抑留し得可きは一般に認めらるる所なり。

（終）

三三四

社會價値の概念

政治科　小泉信三

（本年二月發行 Quarterly gourual of Ecomics pp. 213-232 ヨセフシュムペーター氏の所説三田讀書會報告）

目次

一、純理研究の方法は個人的なり　二、社會價値の概念の意義　三、社會價値の概念は社會及び其行動に干し樂觀的見解を取らしむ　四、代價論と社會價値の概念との干係　五、再説

ジェヴォレス、ワルラ等以後所謂正統學派に對する新學派の純理經濟學は個人價値を論じて社會價値を言はざりしが近來漸く學者の社會價値の概念を説く者出で（クラーク殊に然り）一般の承認を得んとす。而かも其の概念に至ては未だ周到なる定義を見ざるを以て之れが眞義と其經濟學組織上の地位とを論ずるは興味あるとに屬す、本論の目的亦實に茲にあり。

一、先づ特に言ふ可きは純理（經濟學）研究は個人的方法に依ることと之れなり。近來の學者は其の

れを代表す）充足が其欲望の强度に及ぼす影響に干する或推定に由りて所謂利用曲線を（Utility curve）作り之れに對する財の存在量如何によりて限界利用を定め之れを以て凡ての推論の根據となし方便となす。此に於てか吾人は之等の理論が個人を獨立の單位とするものなるを見る。何となれば唯個人のみ能く欲望を感ずることを得可ければなり。同時に限界利用又は價値を論ぜんとせば或社會の富が如何に各個人間に分配せられあるかを驗せざる可らず、蓋し限界利用は個人が有し得る財の量に依り而して是は又各人が依て以て財を得可き一設の資力に依る者なればなり。吾人は先づ個人の欲望を研究せざる可らず。次に個人の富を知らざる可らず。卽ち吾人の研究は個人を以て出發せざる可らざるなり。此研究法に依て吾人は需要、供給、代價（代價なる語を著者は獨語の Preis 卽ち交換價値の如き意に用ふること注意す可し。編輯者附註）從て財貨分配、各個所得の關係。財の量と代價との關係を知る。而して此方法の誤らざることは人の肯ずる所なり。

然るに此推論法は直に取て以て社會に應用す可らず。頭腦なく神經なき社會は欲望を感ぜず。從て個人に於ける如き『利用曲線』を有する能はず、社會內の財は個人支配の下にありて其個人の欲望に從て充用せらる。其欲望の內容如何を問はず欲望を感じ之れが充足を計る主體は個人にして社會に非ず。故に市場に於ける凡ての需要は之れを個人的の者なりと云ふことを得。唯一つ嚴密なる意味に於て社會的欲望と稱し得可き者あり。其は意識的に全社會に依て主張せらるゝ欲望にして共產社會の場合に於て實現せらるゝもの之なり。此場合には多少複雜なる關係は生ず可しと雖『社會的利用曲線』從て社會價値なる者あること尙個人に對する個人價値の如し。然れ共共產社會以外に於ては只個人の欲望、需要價値及び其相互作用（interaction）あるのみ。便宜の問題として『一般的需要曲線』（general demand curve）ありとなすは可なりと雖、其は個人的曲線より獨立して存在せる

者に非ず嚴密なる社會價値の概念とは全然相異るものなり。

二、上述する所により非共產社會に於ては社會價値の概念に明瞭自然なる意義の附し難きを見たり。更に進んで此概念が如何に使用されたるかを驗し以て其性質と重要とを明にせん。

多くの學者は例へば生產交換分配（少くも後の二者）を一個人にて行ひ得ざるの故を以て之れを社會的過程と呼び、此意味に於ては代價は明かに社會的現象なりと爲すが如く、個人の相互作用或は種々の社會的影響を特に强く言ひ、社會價値の概念を之れと關聯せしめて用ふることあり。然れ共之れ甚だ無用の事にして純理論の個人的なることを否定すること能はず。單に個人間の相互作用、相互關係と其結果とを示すのみ。

以上の議論は異議を容れざるものと信ず。依て次に此概念の最も重要なる應用を研究す可し。其應用とは如何。答へて曰く（一）「物の價値を定むるには個人に非ずして社會なり」（二）「交換價値は社會的使用價値なり」との說の當否之なり。

物の價値を定むる者は全體としての社會なりとは種々の意味に於て眞にしてセリグマン氏の詳論する所なり。若し價値なる語が交換價値を意味せば其は勿論單一の個人に非ずして凡ての者の行爲が定むる所なり。只此場合に於ても個人欲望の總量が之れを定めずして自利心及び分配狀態に從て作用する各個の欲望之れを決する者なり。然れ共今吾人の問題とするは社會價値を多少獨立せる者として思考し得べきや否やの點之れなり。而して之れは個人の『利用曲線』若くは限界利用は交換なき間のみ彼自身に依て定められ、一旦交換發生するや其人の評價は市場にて該財に換へて得べき財の如何、卽ち他人の該財に對する欲望の加何に由て影響せられ著しく變化ずとの事實と、個人は其欲望に關し意識的に又無意識的に他人の夫れと比較し之れを模倣す（所謂流行は此適例を示す）との事實とに依て支持せらる。此の如く社會的影響は個人的需要個人的利用を支配すれ共吾人が現社會

るに於け純理の研究は正に此個人的需要、個人的利用を根據とせざる可らず。此如き社會に於て「社會が評價す」と云ふは比喩に過ぎず。其は個人の相互作用と云ふと殆ど同義なるを以て假令謬れりと云ふ可らずとするも畢竟無用の辯たるを免れず。

而して社會が價値を決定する者とせば物の交換價値は社會的使用價値なりと云ふことを得可し。ロードベルトスは此見解を持し市場にて代價が代表する交換價値は同じ財が共產社會に於て付せらる可き價値に同じと云へり。

・セリグマン氏は之を說明して曰く「團體は各個人の選擇を比較せる後例へば一箇の林檎の缺乏の不滿足は胡桃一箇の缺乏の夫れに三倍することを發見す。」「價値は社會的限界利用の表象なり」と果して眞か。之れ共產社會に於ては然りと雖非共產社會に於ては次の如き條件あるを知らざる可らず

（一）社會各員が其欲望を發表する爲め會合し、而して其欲望は各人の資力如何に關係なく同樣に取扱はるゝこと

（二）同種同量の貨物が兩社會に於て生產せらるゝこと

（三）分配の原則が兩社會に於て同一なること

（一）に關しては既に略述せり。而して自利心に從ふ各人の需要に依て居る生產が社會全體の統一的生產と異なる限り（二）の條件は充たされず。非共產社會に於ては分配は效程（Efficiency）の原則に由るも共產社會に於ては要求（Need）の原則に依り或は假に同じく效程の原則に依るとするも前者に於ては人が所有する生產働因の效程に依り後者に於ては人自らの效程に依るものなるが故に以上の條件は悉く實現されざるなり。

故に斷じて曰く一個の社會價値を以て多くの個人價値に代らしめんとするは比喩に過ぎず。而して此比喩は非共產社會に於ける價値、代價、所得が凡て既定の富の分配に依て支配せらるゝが爲め甚だしく事實と遠ざかるものなり。吾人は更に分配の問題を論じて此事を證せん。

三、今や社會價値論の最も興味ある問題に達せ

り。卽ち社會價値の概念が樂觀的分配論の方便として利用せらるゝことゝなれり。此說は「自由競爭の社會に於ても各生產要素は結局其勤勞が社會に貢獻したる丈けの分前を受く」と說く者にして其精密の論述はクラーク、ヴキーザーに始まり現今カーヴアー氏の「分配論」(ディストリビュションオブヴェルス)最も善く此傾向を代表す。

經濟學組織の上より見て此說の重要なるは生產要素の社會價値を以て分配を說明し、煩瑣複雜なる代價の問題を避けんとするにあり。社會價値の概念は實は此理を論せんが爲めに案出せられたるかの觀あり。其構說の第一步は共產社會に於ける經濟現象を說明し、次に非共產社會の現象も本質に於ては之れと異ならず同一の定理が兩者に適用せらる可きを示すにあり(例へばクラーク分配論の第三章參照、譯者註)之れに依て一方經濟行爲を指導する原則として社會價値を得、他方に於ては自由競爭社會の事物をより、明瞭に理解し得可しとなすなり。固より此第一步卽ち共產的社會に於ては凡ての物の價値が社會に依て定められ從て生產要素の價値卽ち生產物に對する分前を定むると疑を容れず。唯考究を要するは第二の推定、卽ち社會價値の概念を非共產社會に迄及ぼさんとするの可否如何にあり。勿論價値に關する根本的理法は社會組織の如何を問はず適用せらるゝ者なれば、共產社會現象の研究が一般經濟現象研究の基礎として甚だ有要なると明なり。然れ共吾人の決せんと欲するは此研究が果して自由競爭的社會に於ける分配を完全に正當に說明し得るや如何にあり。前揭の諸學者は奇妙なる方法に由りて此調和を試みんとせり。卽ち彼等は社會價値の概念を許す可き共產社會に非共產社會の特徵たる生產要素の私有——地主資本家——競爭等の觀念を挿入して以て貨財が社會價値に支配せられて個人間に分配せらるゝことを示さんとせり。然れ共之れ明に現存する經濟組織の叙述に非ず。自由競爭が行はれて而かも社會が上述の如く組織されたる場合に事物は正に然かある可しと敎ふるのみ。結論は若し吾

人が『社會的利用曲線』なるものを推定せば其場合の社會は共產社會にして個人が地代利子を受くることなく、又地代利子の支拂はるゝ場合には社會價値なるものなくして個人價値のみ存在すと云ふにあり。

四、以上論ずる所に在て分配論が價値論に依らず代價の理法に依てのみ闡明せらるゝと明なり。故如何と云ふに今假に地主、資本家、勞働者を相競爭せざる三團體と見よ。然れば地代、利子、賃銀は各三團體間の交換の結果卽ち代價となすことを得、而して此結果たる代價論の敎ふる如く不決定の者にして理論は代價の落つ可き上下の限界を定むるも、正確に幾何の點に於て決するやは告げ能はざるなり。此場合各團體は其生產要素を一定の度に從て評價し得るを以て土地資本勞働に對する利用限界利用は定れり、而かも其代價は決定せず從て生產物分配に對する分前は定まらざるなり。見る可し貨財の分配は價値に非ずして先づ代價に關するとを。尙又假令社會が自ら價値判定をなし之を三團體に宛てはむるも、若し彼等にして各個自利を爭はば結局其分配狀態は豫知す可らざるなり。只一つ問題の決定され得る場合あり。若し三團體が其各自の利益に非ずして總體卽ち社會最大の滿足を計る時は彼等の分前は決定す可し、而かも此社會は共產社會の特徵を實現することとなり社會價値の概念に基く學說は個人價値推定の下に達したると異なる結果に導くことを示すに止らん。然るに說をなす者あり、完全なる自由競爭の制度の下に於ては各人は其社會に貢獻したる丈けを報酬として受け、社會自身の意識行爲が齎らす所と同一の結果を得可く物の社會的限界利用を定め、各人が最大の利益を受く可き樣に分配を行はしむ可し。而して爲めに非共產社會內の分配を社會的曲線を以て表はすを得可く又分配は價値の現象に由て說明せらる可しと。然り。唯次の注意を以て此說に對することを要す。

(い)競爭によつて決定せられたる者は價値に非ずして代價なり。價値は已に以前に決定す。故

に若し社會價値の概念を非共產社會に應用し又分配を支配する社會的限界利用なる者を想定し得可しとすれば其は唯代價現象あるに由る。非共產社會の現象を明にせんと欲せば漠然「社會的評價」を云はずして代價を研究するの要あり。

(ろ)各生產要素の受くる所は其勤勞の總體價値に由らずしてフィッシャーの所謂利用價値、卽ち或人が一定量に於て賣る生產要素の社會的利用の成果に由る。

(は)共產社會に於けるが如く非共產社會に於ても平準は最大の滿足の點に於て定まると眞なりと雖、其は各々與へられたる條件の下に於ける最大の滿足なることを記す可し。而して非共產社會內に於ける條件としては先づ與へられたる富の分配あり。分配論に就ても已に與へられたる富の分配は量大なる關係を有す、而して之れ代價現象の研究によりて知り得可きのみ。

更に論ず可き一點あり。或財に對する一社會中の最小の利用は各財が市場にて支拂はるゝ額を決定す。之れと同じく生產要素に對する一社會中最小の利用は生產物の分配を決定すと云ふを得。此の如き利用之れを名けて社會的限界利用と云ふも不可なし。只此は社會的利用曲線より得たる者に非ず、或時偶然限界賣手たり賣手たりし個人の利用なれば之れを個人に對し限界利用あると同じ意味に於て社會的限界利用と云ふの不可なるや明なり。已に然り。然れば此限界利用は代價論に代りて事物を說明すると能はず。又社會の欲望充足が幾何の點迄達したるやを示すこと能はざるは素より其所なり。

最後に云はん之等の限界利用を過重すると勿れ之は或意味に於て代價を決定すれ共、代價は或生產要素の幾何量が生產に供せらる可きやを定むるを以て生產要素の限界利用を定むる者と云ふとを得、要するに眞理は一社會內の財の各個人に對する分量、價値代價の相互作用を明確に認識することによつて得らる。凡て之等は相互に影響し相互に關係す。四つの社會的限界利用が代價を定むとは人の言ふ所なるが限界以內の個人の利用が代價決定に無關係なるに非ず代價は凡ての人の協働作用に依て決定するなり。

以上述ぶる所によつて社會的分配を充分に說明せんには代價の理論を缺く可からず而して代價の理論は個人價値を基礎とする者なると明白なり。

五、以上余は先づ個人的研究法の正しきことを宣し、非共產社會にありては社會價値社會的欲望の概念事實に適應せざることを述ぶると同時に又社會が個人の評價に直接影響を及ぼし之を均一に近からしむるの大事實を示すは社會價値の功なるを論じ又此概念が共產社會の研究に缺く可らざる者なるを云ひ、或る假想の下に此概念を非共產社會の研究に應用するの利益を述べたり。唯此場合に於て件の概念は滿足なる事實の叙述なりと云ふことを得ず、且つ此場合社會の產業が社會自身之を指導する場合と同一の結果を生ずると云ふは眞ならず、此學說よりしては何等競爭的制度を辯護す可き結論を生せず、同時に他方に於て代價論に依らずして此說のみを以て分配を說明するの不可能なるを論じたり、卽ち予は現在の經濟現象研究法は正當なりとの結論を得たり。

附言　本論筆者シュムペーター氏は新進經濟學者中純理論に於て近來最も卓越の研究を公けにせる人にして、本論は氏が意見の梗概を叙したるものと見て可なるものなり。小泉君の譯文は明瞭忠實なれば僅かに字句の修正を施したるのみにて玆に揭げたり。

本論論ずる所は分配論の根本問題にして又た同時に社會主義の學理を判定するに缺く可らざる大問題なり。卽ち所謂 Right to the whole produce of labowr (勞働全收論)の主張は現時の社會に於ても行はる、必ずしも私有財產制度を廢するを要せずして、此の意味に於ける『正當なる分配』(各人必ず其勞に對する全價を受く)行はる可しとの一部學者の議論の謬れることを明示すること是なり。『自由競爭』と『社會價値』とは到底兩立す可からず、私有

財産の社會は亦個人價値より出立するのみにして、畢竟は物價(代價)成定の理法の支配を脱する能はざるものなりとはシュ氏主張の骨子なり。從て分配論の研究は依然として自由競爭を度外視す可からずとの結論を得たるものなり。

予はシュ氏の此說は大體に於て動かし難きものなりと思考す。而して社會主義理論中特に勞働全收論に就て空前の研究を企てたるアントン、メンガー氏の說も亦た私有財産の社會に於て『勞働全收權』の實現し難きことを主張するを見ても、愈々然るを思はざるを得ざるなり。是れ予が小泉君を煩はしたる所以なり。

(福田德三記す)

新著批評

匿名女史著 若き女工の經歷談

August Bebel 序
(Jugendgeschichte einer Arbeiterin)

星野勉三

近着獨逸雜誌の新著紹介欄にベーベルが表題の如き一書を公にしたとあるから此社會主義の論客は又何か奇拔な事を云ふのだらうと思つて早速一本を取り寄せて見た尤もベーベルの著婦人と社會主義なる本は頗る有名なるものであるから余は遂に此新著も讀んで見る氣になつたのである然るに讀んで見るとベーベルの著でなくして實はベーベルの序であつた。

此匿名女史の誰れであるかは知る事を得ない乍然書中の模樣では澳太利の婦人の樣に見へる此女の父と云ふのは大の飲酒家で飲めば必ず母を打つと云ふ厄介者で又母は無教育な女であつたから家庭に樂みなど云ふ事は全然なく常に喧嘩を以て滿たされ居つた但し此兩人の意見の一致した點は只一つあつた夫は國家が子供に普通教育を强制するのは不必要で其可否は只兩親のみがよく所決し得るのである而して其娘の如きは家が貧困であるから學校へ出すよりは却て工場へでも通はして賃銀をとらせるが適當で子供を通學させぬとて罰金を課するが如きは杓子定規の處置であると云ふ點のみであつた、扨て不和と貧困との間に育つた此娘は到底幸福なる可き筈はなかつたが間もなく父は不養生の爲に死んで其葬式の際に黑の喪服を借りて着た時は却て幸福に感じて此儘で居たいと思つたと自白して居るのは境遇の爲とはいへ乍ら實に淺ましき次第である此父の死後は母が工場へ通つて其手一つで五人の子供を養ふので此娘も徒食して居る譯に行かず僅かに八歲にして女工として工場へ入る事になつた之が爲に毎日規則正しく通學する事は出來ず餘り缺席が多いので其母は監督不行